河川弘之
自選作品集
VI

# 暗い波濤

（上）

阿川弘之自選作品―VI

新潮社版

# 阿川弘之自選作品

## Ⅵ

© Hiroyuki Agawa, Printed in Japan, 1978.

暗い波濤（くらいはとう） 上巻

昭和五十三年四月二十日印刷
昭和五十三年四月二十五日発行

著者　阿川弘之（あがわひろゆき）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務〇三（二六六）五一一一
編集〇三（二六六）五四一一　振替東京四―八〇八

印刷所　二光印刷株式会社

製本所　新宿加藤製本

定価二七〇〇円

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

# 目次

暗い波濤（上）
作品後記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 阿川弘之自選作品 Ⅵ

# 暗い波濤

上巻

# 第一章

## 一

日本がアメリカと開戦してから二度目の春、昭和十八年四月初めのよく晴れた風の強い朝、特設巡洋艦の愛国丸は、木材、米、砂糖、バナナなど底の船艙一杯の積荷といつしよに海軍荻野部隊五百七名の予備学生を乗せて、糸島半島の北を関門海峡へ近づきつつあつた。

艦内各部署には、白い木綿の事業服を着た学生たちが二十四時間当直で実習に出てゐた。ある班はゴムの雨合羽をまとつて艦首艦尾の対潜見張に立ち、ある班は艦橋の航海当番見習に立ち、四時間ごとに次の班の者と交替する。

前夜、奄美大島の南から五島列島沖にかけて、東支那海はずつと南西二十メートルの強風であつた。しぶきがデッキを濡らし、暗い海のおもては夜目に白く無数の波の穂でおほはれてゐた。いつ敵潜水艦の襲撃があるか分らないが、この時化では潜望鏡はもとより雷跡の発見も極めて難しさうで、船は夜ぢゆう之字運動をつづけてゐた。

羅針盤の上に豆ランプが一つ、あとは各種計器の螢光塗料だけが青く光つてゐるくらやみの艦橋で、計時員がストップウォッチを片手に、

「十秒前」

「五秒前」

「ヨーイ」

「テー」

と報ずると、当直将校が低い声で転舵を令する。操舵員が復唱して舵を切り、それから「戻せ」で舵を戻してあて舵十度にあてて三百何十何度宜候となる。

かうして船は五分おきに針路を変へ、之字運動丙法と称する複雑なジグザグ運動を繰返した。

航海科の号令詞は、「もどおせええ」といふ風にゆつくり長く引つ張るので傍で聞いてゐると睡くなるやうな響があるが、眠気を催してゐるわけには行かない。任せられる作業は学生たちに任されてをり、彼らは艦の保安の責任を分担してゐた。

最後の夜も、どうやら何事も無くて明けた。波は少しをさまつて、遠く北九州の陸岸がすでに見えてゐる。

明け方の当直実習に出た学生たちは次の番の者と交替し、疲れ果てて船艙内の居住区でしばらく許された眠りについた。

五百余人の予備学生隊は一分隊が十一班から十九班まで、二分隊が二十一班から二十九班までといふ編成で四ヶ分隊三十六ヶ班に分れてをり、其の朝八時から十二時の当直は末尾に八と九のつく八ヶ班、そのうち第一分隊十九班の十六人が艦橋の見習に立つた。

昨晩煙突から波をかぶる難航ぶりで遅れてしまつた護衛駆逐艦の「早苗」が、追ひついて来て左舷後方を同航してゐる。十六人の学生は順に双眼鏡をまはして、黒い舳を波に突つこんでは海水を蹴上げてゐる駆逐艦の姿と、右舷側のなつかしい九州の岸辺を交互に眺めてゐた。

私語は禁止とされてゐるので、しやべりたいのを我慢してゐるが、半年ぶりに無事内地へ帰つて来たといふ強い喜びが彼らをとらへてゐた。危険海域は去り、船はいつの間にか之字運動をやめてゐる。

彼らの双眼鏡のまるい二つの視野の中にある「早苗」は、やがて自己の任務を終つたと判断したやうに前檣に信号旗を上げ、

「ワレ反転、佐世保へ帰投ス。安全ナル航海ヲイノル」

と信号を送つて来た。

こちらのマストにも、すぐ信号旗が上つた。

「愛国丸艦長ヨリ早苗駆逐艦長へ。

長途ノ護衛ヲ謝シ併セテ貴艦ノ武運長久ヲイノル」

その挨拶を了解すると、「早苗」は取舵を取つて、次第に西へ遠ざかりはじめ、精悍な黒い艦影は間もなく見えなくなつた。

黄色い蝶が一羽、高く低く飛びながらサイドの旗甲板に迷ひこんで来、風に流されて海の上へ消えて行つた。水鳥や蝶の訪れ、流木や漁船や、石炭の煙の尾を長く曳いた旧式な汽船の姿などが次々にあらはれて来るのは、港の近づいたしるしである。

「一〇四〇本艦は関門海峡に入る。手空き学生は総員後甲板にて狭水道通過見学。なほ本日呉入港後、呉広島方面に家のある者は上陸が許可される予定であるから、昼食時までに各分隊監事まで申し出ること」

と、当直学生がこぶしを腰にあて、駈け足でラッタルを上つたり下つたりしてふれ廻つて来た。当直学生は当直実習の学生とは別で、各分隊から一人づつ選ばれて陸軍の週番見習士官のやうな役をしてゐるのである。

本職の海軍軍人とちがつて呉の軍港や広島周辺に家のある者はさう大勢ゐないので、学生たちの間にちよつと不満と羨望のざわめきが起つた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ちやうど其の時艦橋で、田崎といふ痩せたのつぽの学生が、
「飛行機」と大きな声を挙げた。「近づく。単機。右三十度、フタマルマル。低い。味方艦攻らしい」
田崎の報告と同時に、艦内各部の見張から同じ報告が入つた。
艦橋にゐた者の視線は皆一斉にそちらへ集つた。何処か九州の基地の哨戒機らしい其の飛行機は、何となくのんびりした飛び方で船の上に姿をあらはし、搭乗員の顔の見えさうな高さで後部マストの上すれすれに一度通り過ぎ、翼を傾けて晴れた空に大きな円を描きながらまた近づいて来、発光信号を始めた。
見張も、護衛駆逐艦や味方哨戒機とのやりとりも、計時も、時には操舵も学生たちの実習作業のうちである。軍人としての訓練を受けはじめてから六ヶ月、基礎教育教程を終つて、海軍の実務の一応のことはもうやれるはずになつてゐる。しかし彼らの手元はしばしば怪しくなるので、これはといふ所になると本艦固有乗組員の兵曹が、
「学生、どいて下さい」
と、追ひのけに出て来るが、少くとも飛行機の発光信号くらゐは学生たちの手できちんと取れなくてはいけない。
「アイコクマル——」
と、鉛筆を握つた田崎学生があとを取りそこなつたらしいのを見て、三宅といふ学生が、
「そのあとナリヤ」と助太刀を出した。「愛国丸ナリヤ、愛国丸学生隊ナリヤ」
田崎学生は仲間に助けられて、画板の上の記録用紙にそれを書きとめた。
替つて栗原といふ学生が、久しぶりのつめたい潮風に陽焼けした黒い顔を赤く染め、一字々々一所懸命のぎごちない正確さで、
「ワレ愛国丸。荻野部隊学生隊」
と、飛行機に向けて発光の答をした。
哨戒機は了解符を出し、エンヂンをしぼつて低く飛びながら再び光を点滅させ始めた。それは、
「キサマラノセンパイナリ。イヅレキタエテヤル。ガンバレ」
と読めた。
洋上のかうしたやりとりはすべて四角四面の事務的なものと思つてゐたのに、突然さういふ言葉が飛びこんで来たので栗原達也はちよつと戸惑ひ、飛行機を見つめたままの姿勢で、
「隊長。何と応答しますか？」
と叫んだ。鍛へてやると言はれても、このあとすぐ九州

の航空基地に配属になる者は一人もゐないのである。
先程からブリッジに上つて来て羅針盤の横に立つてゐた部隊長の荻野大佐は、
「何処の飛行機か、あれは？」と、少しむつとしたやうな口調で、「先輩面が見せたくて朝の飛行作業に油を売りに来たんだ。御心配ハ無用ナリと言つてやれ」
さう言つてから、思ひ直したらしく、
「いや、まあ、お前たちが返事をするのだから、誓ツテガンバリマスとでも答へておくか」
と言ひ直した。
飛行機からは、愛国丸の各層デッキの上に、士官帽をかぶつた白い事業服姿の学生が群がつて空を仰いでゐるのがはつきり見えてゐるだらう。搭乗員の中に、彼らと似た境遇の飛行予備学生出身の少尉か中尉がゐるにちがひなかつた。
飛行機は、「セイセンカンスイ、チカツテガンバル」といふ栗原の発光信号を読み取ると、満足したやうに翼を振つて再び南を指して飛び去つて行つた。
荻野大佐は、
「生意気な奴だ」
と言つたが、機嫌はそんなに悪くなささうであつた。
「しかし諸君はよろしい。よくやる。実によくやるやうになつた」と隊長は言葉をつづけた。「昨年角帽に金ボタン姿で佐世保を出た時の諸君はまつたくの烏合の衆であつた。実に雲泥の相違だ。今回の作戦海面を突破しての航海実習も亦極めて有意義であつた。海軍の軍人は潮ッ気が脱けては駄目だ。今のは何処の飛行機であつたか隊長は知らぬが、帝国海軍の艦船部隊は皆絶大なる期待を以て諸君の帰還を見守つてをる。諸君の熱心で真摯なる実習ぶりは、本艦乗員もひとしく感心して見てをつてくれる。——さうだな、航海長」
物言ひがいつも訓辞口調になるのは荻野大佐の癖であるが、大佐は過去六ヶ月間の自分の教育の成果に満足してゐるやうに、象みたいな眼をもつとほそくして艦橋の愛国丸航海長の肩を叩いた。
愛国丸は、もと大阪商船の南米航路船であつた。開戦の年海軍に徴用され武装をほどこされて、南太平洋や印度洋方面での通商破壊戦に従事して来たが、此の度予備学生隊輸送の任を受け、台湾の高雄から呉までの航海中、彼らの臨時の練習艦のやうなかたちになつてゐた。
乗組士官の中には商船学校出の応召軍人が多い。長らく実戦に従事して来た航海長は、学生たちの前で肩を叩かれ讃辞を求められて少し閉口したやうな表情をしたが、そこは遠洋航路の商船のオフィサー上りらしく、

「はあ。これだけの数の学生諸君が近いうちに初級士官として各方面の第一線に立つてくれるかと思ふと、私らもまことに頼もしい気がしますよ」
と、あたりさはりの無い返事をしてみせた。
艦橋番の学生たちは、くすぐつたげに黙つて顔を見合せた。発光を担当した栗原達也は、照れくさくもあり、且つ荻野隊長のかういふ大袈裟な言ひ方が好きでなかつたので、双眼鏡を取り上げて船の針路前方を無意味に睨んでゐた。
三ヶ月前飛行科転科の志願をした時のことを彼は思ひ出した。格別めざましい働きをしてゐるわけでもないのに、隊長ぢきぢきからこんな風にむやみとおだてられると、気持の落着き具合が悪くなつて、平素意識のすみの方へ押しやつてある不吉なものがまた首をもたげて来る——。

## 二

南台湾の西海岸東港といふ町の近くに、海軍の大型飛行艇の基地があり、飛行艇群が全部ソロモン方面の前線へ出払つてしまつたあと施設が半ば空き家になつて、其処へ彼ら五百人の予備学生を教育するための海軍荻野部隊が開設されたのは前年の十月であつた。
隊長は荻野庄平大佐、その下に中佐の副長が一人、若い大尉の教官が五人と軍医長、それから数人の特務士官と兵曹長と数十人の下士官教員と従兵。五百人の学生を中心にしてそれが此の教育部隊の全容であつた。
「此処はもはや娑婆ではない。早く娑婆ッ気を抜いてしまはねばいかん」
「お前たちの身体に染みついた自由主義教育の滓を、すみからすみまで洗ひ落すんだ」
「誰だ！　酒保に向つて駈け出したのは。海軍士官は食ひ物に向つて駈け足をしてはならぬ」
「自覚を持て。何のために最高学府を出て来たか。海軍は猿に士官服を着せるのではない」
「海軍は貴様らの頭脳も要らん、技能も要らん、ただ貴様らの命が申し受けたい」
彼らはさう言つてよく叱られ殴られた。時には前後列一歩開いて向ひ合ひ、学生同士で猛烈な殴り合ひをさせられることもあつた。眼から火が出るといふのは打ちどころによつてはほんたうの話である。
ただ、彼ら五百人には上級生も下級生もをらず、話に聞く陸軍の初年兵教育のやうな革スリッパのびんたとか鶯の谷わたりとか、陰湿で理不尽ないぢめ方をする古年兵もゐなかつた。下士官教員は身分の上では彼らの下級者になつ

てをり、学生隊の中、どちらを向いても「貴様慶応か、俺は早稲田だ」といつた具合で、全般の戦況も未だそれほど悲観的には考へられず、日曜日外出先のクラブには豊富な食ひ物が待つてゐて、いくら叱られても娑婆の学生気分がなかなか抜け切らなかつた。

兵学校出の若い教官たちには、書生気分の抜けない、この予備学生隊の教育は、厄介な仕事にちがひなかつた。うつかりしたことを言へば、歴史でも数学でも法律でも、各分野に専門家がゐる。どうせ兵隊に取られるなら陸軍よりはましだらうぐらゐのつもりで志願して来た連中が過半数で、自分たちと肌合ひのちがつたかういふ人間どもの集団を、どうやつて心底から海軍の規律に従はせるか。二た言目には、教官の口から「兵学校においては」といふ叱言が出た。

兵学校、兵学校とむやみに言はれるのは耳ざはりであつたが、栗原は、

「全く俺たちも少しだらしが無さすぎるところがある。此の戦争は職業軍人にだけ任せてそつぽを向いてゐられるやうなものぢやない。士官に準ずる資格で海軍に入つた以上、俺たちももう少ししつかりしなくては」

と、時にさう思ふこともあつた。

「熱があるのか？　風邪をひいて熱が高ければ苦しいのは分るし、休ませてもやる。しかしさういふ情なさうな顔はするな」

と言つて、隣りの班の学生が一分隊監事の浦部大尉に叱られてゐるのを見た時も、彼は学生に同情するより教官の言ひ分の方が尤もなやうな気がした。

彼ら五百七人の学生隊はかうして、兵学校流の、陸戦、銃剣術、棒倒し、カッター、軍歌演習、帆走法、機動艇、手旗、結索、暗号、天測、発光信号、諸例則、勅諭と、あらゆる基礎的なことを次々に叩きこまれて行つた。

やがて六ヶ月の予定の教育教程がおよそ半ばに達し、南台湾にも冬が来て別科の水泳が無くなつた頃、一週間ばかり東京へ出張をしてゐた部隊長の荻野大佐が飛行機で東港へ帰つて来た。其の晩学生総員は講堂に集められた。

「隊長は此の度所用があつて上京し、本日帰任したのであるが、中央では諸子が極めて元気旺盛気力充実、立派な海軍予備士官の候補生として着々教育の成果をあげつつある模様を逐一報告して来た。海軍荻野部隊にはいやしくも忠節の念に欠くるやうな者、心弱くいぢけてゐる者などは一人もをらないといふことを私は詳しく述べて来た。諸子は全国の大学高等専門学校学徒の花であり、真に彼らの模範となるべき者である」

教官からあまり賞められたことのない五百人の学生は、

隊長の一と調子高い演説を初めのうちけげんさうな面持で聞いてゐた。

「中央の教育局、人事局、或は軍令部あたりにおいても」と荻野大佐はつづけた。「諸子は非常な注目のまとであり、諸子の卒業の日の一日も早からんことが望まれてをる。国家の将来、戦争の成否は今後諸子の双肩にかかつてゐると申しても言ひ過ぎではない。しかしながら太平洋方面の戦局は一層苛烈の度を加へて来、これからの戦ひは航空兵力と航空兵力との戦ひになる様相が深まつて来た。敵国アメリカにおいては今や、大学を出た青年たちが陸続として進んで軍のレザーブ・パイロット・オフィサーを志願しつつあると聞く。我帝国海軍としても、優秀な士官搭乗員がもつともつと必要な時なのである。諸子は一般兵科予備学生として当隊へ入つて来て教育を受けてをるのであるが、どうであらう、諸子の中にもし今からでもよい、戦局にかんがみ自分は飛行科に変つて飛行機乗りとしてお国のために働いてみようと思ふ者があるならば、一つ申し出てみてもらひたい。隊長は諸子の希望が叶へられるやう、これを中央に具申したいと考へるのである」

其の頃から講堂のあちこちで、具合悪さうにそつと面を伏せる者が出て来た。うつむきながら横眼で親しい仲間の様子をうかがつてゐる者もあつた。同じ海軍でも、飛行科へ行つたら、戦死率がうんと高くなるのは誰でも知つてゐる。栗原はしかし、しつかり顔を上げて講壇の荻野隊長を睨んでゐた。こんな時に眼を伏せるのは卑怯だと彼は思つた。

「ソロモン方面の戦況は」とか「アメリカの青年に負けてはならぬのであつて」とか、隊長は更に何か言ひつづけたが、耳によく入つて来なくなつた。栗原の胸は動悸をうち始めた。

其の時不意に一人の学生が、

「ハアイ」

と右手を挙げた。

連鎖反応が起つたやうにバラバラッと十数人の手が挙つた。

「さうか、希望者がをるか」

荻野隊長は壇上からざつと頭数を読む様子で、

「よろしい、手を挙げた者は前へ出て来い」

と、甲高い声で言つた。

思ひなしか不断より荒い靴音を立てて、十数人の学生が講壇の前へ進み出て行つた。

「よし、俺も行つてやる」

咄嗟に栗原は思つた。自分の気持が動揺するのを抑へるやうに急いで彼は右手を高く挙げた。手を挙げる者の数は

更にふえて来た。栗原は立ち上つた。彼の前からも横からも次々に学生が立ち上り、歩き出し、講壇の前にはやがて七十人ばかりの列が出来上つた。

其の晩、手を挙げなかつた学生どもが何となく少しうしろめたいやうな気分でぞろぞろ巡検用意に学生舎へ引揚げて行つたあと、栗原ら七十数名の志願者は、月明の練兵場に集合を命ぜられ、第三分隊監事の若い鈴谷大尉から、

「教官はこれまでお前たちの心を疑つてゐた。そしてお前たちのだらしなさを叱つてばかり来たが、今夜は感動したぞ。今夜初めて私はお前たちの大和魂を見せられた」

と、はげしい激励的訓辞を与へられた。

翌日、転科希望者には隊内で簡単な適性検査が行はれ、志願の趣は取りまとめて海軍省に伝達、教育は此のまま荻野部隊で続行して、転科の決定は内地帰還後行はれるといふ申し渡しがあつた。

だが、そのあと、冷静にかへつてから、栗原の心には何度か迷ひが湧いて来た。

「どうして俺はあの時手を挙げてしまつたのか」

荻野大佐はもともと砲術科出身で、大艦巨砲主義の古い型の海軍軍人であつた。戦局の成り行きで海軍の上層部の方針に変化が生じ、隊長は東京に呼び寄せられて何かを言ひふくめられて来たにちがひなかつたのである。おそらく五百人のうち二割程度を飛行科へまはせといふやうな、いはばつめたい数字の上の要求がなされたのであらう。隊長の演説は誰かの指令でやつてゐる左翼のアジ演説のやうだつたと彼は思つた。「元気旺盛気力充実」とか「国家の将来は諸子の双肩に」とか前口上でおだてられるのは、あの場合自分らが侮蔑されてゐたに近かつた。それが半分解つてゐながら何故発作的に手を挙げてしまつたのだらう。

多分、一つは母方の親戚に海軍の軍人がゐて、子供の頃から海軍に多少の馴染みがあり、特に海軍の飛行機といふものに彼が興味を持つてゐたからである。二つにはかねて同分隊同班の学生たちを見てゐて、みんな此の戦争に対して少し心構へが暢気すぎる、ともかく軍隊に入つたといふのにちとだらしが無さすぎはしないかと思つてゐたせゐだらう。それからもう一つ、大学生時代レマルクの「西部戦線異状なし」を読んで、主人公のパウルが自分の突き刺したフランス兵と砲弾穴の中で一緒に暮すはめになり、死にきれない敵兵が咽をぜいぜい鳴らしながら呪ひの眼でパウルを見つめるといふ場面に、同じ戦争へ行くにしてもああいふのはとてもたまらないと思つた経験があつた。其の点飛行機乗りの死にやうはあッといふ間のあつさりしたもので——と、さうはつきり考へもしなかつたが、潜在意識的にはきつとそれが作用した。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.